

# 2-4

## 保護者の「学校への満足度」と「家庭の教育力」発揮の現状

ベネッセ教育総研 小林 洋

### はじめに

今回の「学力向上のための基本調査 2004」では、子どもの学習到達度調査・学習意識調査を実施した学校に、教師・校長調査と合せて、保護者へのアンケート調査も同時に実施した。アンケートの依頼・回収は子どもを通して行っている。アンケートの平均回収率は、小学校は99%、中学校は91%であった(子ども調査は実施したが保護者調査は実施しなかった学校を除く)。調査の内容はいくつかのテーマに及ぶが、本節では、(1)学校の学力向上の取り組み状況についての保護者の評価・認識、(2)家庭と学校の教育の役割分担についての保護者の認識、ならび

に(3)保護者の子どもへの働きかけ(「家庭の教育力」の発揮)の状況、の3つについて調査結果の概要を報告し、家庭と連携した学力向上の取り組みを進めている、あるいはこれから改めて力を入れて取り組んでいこうとしている学校に参考にしていただくことを考えたい。とくに(3)の「家庭の教育力」の発揮の状況については、後章で子どもの学力形成との関係(第3章2節)、また「学校の経営力」との関係(第3章5節)が分析されている。本節ではそれらを考察するにあたっての前提的な情報を紹介しておきたい。

### 1 学校の学力向上の取り組みへの保護者の評価・成果認識と満足度

学校の学力向上の取り組みに対する保護者の認識を問う項目は、次節に見る「学校の経営力」のMOREモデルの4つの領域(校長の経営方針(M領域)/組織・体制の連携(O領域)/教育資源の有効活用(R領域)/教育課程の整備・充実(E領域))にほぼ対応した領域について、**図表 2-4-1**に示すように全20項目にわたって設定した。回答は4件法を採用

しているが、学校の取り組み状況の認識を問う設問群については「わからない」という回答の選択肢も加えている(なお、小学校4年生の保護者と6年生の保護者とは全体の単純集計で見た場合、顕著な差が認められないため両者を合わせた平均数値を示している。これは他の図表についても同様である)。

#### 1

### 6割以上の保護者が「熱心に授業や生活指導にあたっている教師が多い」と肯定的に評価

「わからない」という回答の割合は、保護者の学校教育への関心の度合いを反映している側面もあるが、学校から保護者に対して学校の教育方針や施策についてどの程度説明責任が果たされているか、あるいはどの程度保護者に対して開かれた学校になっているかを端的に表す指標とも言えよう。図表 2-4-1を見ると、この「わからない」という回答割合が30%を超えているのは、小・中学校ともに校長のリ

ーダーシップの発揮の認識に関わる2つの項目と、小学校では、「子どもの成績をつける基準や考え方ははっきりしている」という項目、中学校では「教師によって授業の進め方や進度に大きなバラツキがない」および「パソコン教室や空き教室などの施設・設備を、十分に活用している」という項目となっている。校長のリーダーシップの発揮状況に対する「わからない」という回答の多さは、もともと保護者には見

図表 2-4-1 学校の学力向上の取り組みに対する保護者の認識

設問のカテゴリー		小学校 (%)				設問番号	設 問	中学校 (%)				
		100	80	60	40	20	0	20	40	60	80	100
学校の経営方針	P D C A の推進	13.1	13.0	60.5	12.8	問2-1	この学校の‘育てたい子ども像’や教育目標は、具体的でわかりやすい。	11.6	53.5	16.6	16.5	
		0.6									1.9	
		11.9	15.0	54.6	16.5	問2-2	この学校は、保護者や地域の声を学校運営や授業改善に積極的に取り入れている。	9.4	46.1	25.0	16.1	
		1.8									3.4	
	13.5	16.4	56.7	12.1	問2-3	この学校は、よりわかりやすい授業の実践に熱心に取り組んでいる。	8.3	47.7	23.0	18.5		
	1.3	4.9								2.4	6.3	
	11.9	28.0	44.3	11.0	問2-4	この学校は、学力向上の取り組みによる成果と今後の取り組みを保護者に説明している。	9.9	42.4	28.9	12.6		
校長のリーダーシップ		33.1	12.5	38.3	13.9	問2-5	この学校の校長先生は、教師をよくリードして学校をまとめている。	11.3	33.8	13.4	37.5	
	2.1	1.6							4.0	3.4		
		31.2	13.0	38.9	15.2	問2-6	この学校の校長先生は、新しい教育に熱心に取り組んでいる。	11.6	35.4	14.0	35.6	
組織・体制の連携	校内の組織・体制	16.6	17.6	50.6	13.3	問2-7	この学校は、熱心に授業や生活指導にあたっている教師が多い。	14.9	50.1	17.2	15.6	
		1.9									2.2	
		27.8	25.5	36.1		問2-8	この学校は、教師によって授業の進め方や進度に大きなバラツキがない。	32.9	24.9	32.0		
	4.9	3.0	5.8				5.2	4.9	2.8			
	16.8	18.1	47.3	14.8	問2-9	この学校は、子どものことを担任教師だけでなく、多くの教師が協力し合っている。	15.0	49.5	15.5	17.3		
	家庭・地域との連携		13.9	17.9	51.9	14.4	問2-10	この学校は、保護者や地域の人々の力を授業によく生かしている。	28.3	33.5	29.0	
1.9		2.3					4.5	4.7	3.4			
13.4		18.3	53.6	12.4	問2-11	この学校は、一人ひとりの保護者に誠実に対応してくれる。	10.7	49.5	19.3	17.1		
有効資源の活用	施設・設備	17.5	16.0	49.4	14.9	問2-12	この学校は、パソコン教室や空き教室などの施設・設備を、十分に活用している。	8.1	37.7	20.8	30.5	
		2.1								3.0		
教育課程の整備・充実	教育課程の編成と実践	20.5	14.8	55.1	8.3	問2-13	この学校は、教科の基礎・基本の指導に熱心である。	43.7	20.3	26.7		
		1.2						6.6		2.7		
		11.8	14.3	57.2	15.7	問2-14	この学校は、自分で調べたり、調べたことを発表したりする学習に熱心である。	16.5	44.5	17.7	19.6	
		1.0								1.7		
		16.9	16.9	52.7	12.2	問2-15	この学校は、社会性や他者への思いやりなど、豊かな人間性の育成に熱心である。	10.2	47.7	17.5	21.8	
		1.4								2.8		
		26.4	31.8	33.0		問2-16	この学校は、子どもの将来への夢を育み、目標を持たせることに熱心である。	8.2	39.6	25.3	23.4	
		3.5	5.4					3.4				
		15.7	26.7	44.4	9.5	問2-17	この学校は、コンピュータやインターネットの使い方をしっかり身に付けさせようとしている。	36.2	27.3	24.9		
		3.8						6.9		4.8		
32.8	27.9	30.9		問2-18	この学校は、子どもの成績をつける基準や考え方がはっきりとしている。	37.7	23.8	27.4				
3.7	4.6					7.2		4.0				
13.8	13.9	55.8	14.5	問2-19	この学校は、子どもの個性やよいところを認めてくれる。	10.7	51.5	18.6	16.3			
2.0	1.5							2.8	2.9			
18.2	15.1	53.0	12.2	問2-20	この学校は、子ども同士の学び合いや助け合いを大切にしている。	8.9	42.3	18.2	27.9			

「あなたのお子様を通っている学校では、次のようなこと(各設問のようなことは)どの程度あてはまりますか?」という問いに対する回答状況を示す。無回答・無効回答は除いた数値となっている。有効回答件数は、小学校保護者：約3800件、中学校保護者：約2480件。

えにくいということも考えられるが、新しい校長に交代したばかりという学校も少なくないという事情も反映していると考えられる。反対に、「わからない」という回答が15%未満であるのは、小学校では「自分で調べたり、調べたことを発表したりする学習に熱心である」「保護者や地域の声を学校運営や授業改善に積極的に取り入れている」などの8項目であるのに対して、中学校では「学力向上の取り組みによる成果と今後の取り組みを保護者に説明している」という1項目のみとなっている。

学力向上の取り組み状況を問う設問で「とてもあてはまる」というトップボックスのスコアが20%を超える項目は、小・中学校を通して存在していない。

現状では、学校の学力向上の取り組みを積極的に評価している保護者の割合は多いとは言えない。しかし、「まああてはまる」というセカンドボックスまでのスコアで見ると、小学校では、「この学校の‘育てたい子ども像’や教育目標はわかりやすい」「保護者や地域の声を学校運営や授業改善に積極的に取り入れている」「自分で調べたり、調べたことを発表したりする学習に熱心である」「子どもの個性やよいところを認めてくれる」の4項目で70%を超え、中学校では、70%を超えるものはないものの「育てたい子ども像」や教育目標はわかりやすい」「子どものことを担任教師だけでなく、多くの教師が協力し合っている」「熱心に授業や生活指導にあたっている

教師が多い」という項目など6項目で60%を超えている。これらは、学校の努力がうかがわれる数値である。

上で見たような学力向上の取り組み状況の保護者の認識と、「この学校に子どもを通わせてよかった」

「この学校はこれからも良くなっていくと思う」という設問の肯定度合いに現れるような保護者の「学校に対する総合的な満足度」とは、後述するようにあきらかな正の相関が認められる。

## 2 保護者の学校教育の成果認識は全般に教師の成果認識よりもきびしい

図表 2-4-2 学校教育の成果としての保護者の子どもの変容認識

とてもあてはまる
  まああてはまる
  あまりあてはまらない
  まったくあてはまらない

設問のカテゴリー	小学校 (%)				設問番号	設 問	中学校 (%)						
	100	80	60	40			20	0	0	20	40	60	80
教科学力	知識・理解	4.2	47.6	43.0	5.2	問3-1	子どもの教科の成績が上がってきた。	3.3	33.1	54.0	9.7		
	思考・判断	3.2	44.2	47.5	5.1	問3-2	子どもがじっくり筋道立てて物事を考えるようになってきた。	4.8	44.6	45.2	5.4		
		2.8	35.4	54.9	6.9	問3-3	子どもが主体的に考え、判断するようになってきた。	7.4	53.1	35.4	4.1		
	技能・表現	5.3	42.9	45.3	6.5	問3-4	子どもの文章を書く力や話す力が育ってきた。	5.3	38.0	49.6	7.2		
		6.7	44.3	41.5	7.6	問3-5	子どもが意欲的に勉強するようになってきた。	6.7	42.5	41.8	9.0		
	関心・意欲・態度	2.6	35.5	55.3	6.6	問3-6	子どもが学んだことを生活で生かすようになってきた。	3.8	38.0	52.5	5.7		
学びの基礎力	豊かな基礎体験	3.8	41.4	49.5	5.4	問3-7	子どもの生活態度がきちんとしてきた。	5.7	47.8	40.7	5.7		
	学びに向かう力	5.9	51.0	37.7	5.4	問3-8	子どもがこれまで苦手意識をもっていた科目の勉強するようになった。	5.8	42.5	43.6	8.1		
		3.7	32.2	54.0	10.2	問3-9	子どもが「やればできる」という自信がついてきた。	7.2	44.6	42.7	5.5		
	自ら学ぶ力	6.9	46.1	38.7	8.3	問3-10	子どもが辞書の引き方やノートの取り方など、勉強の仕方を工夫するようになってきた。	6.7	37.8	46.9	8.5		
		9.1	53.3	31.8	5.8	問3-11	子どもが、計画的に勉強するようになってきた。	6.2	39.1	45.7	8.9		
	学びを律する力	3.5	34.4	54.8	7.4	問3-12	子どもが人の話を最後まで聞くことができるようになってきた。	7.4	53.2	35.4	4.0		
5.9		49.9	38.5	5.7	問3-13	子どもがわかるまでねばり強く考えるようになってきた。	5.3	35.9	51.8	7.0			
生きる力	問題解決力	5.3	45.1	42.9	6.8	問3-14	子どもが自分で情報を集めて、学習に生かすようになってきた。	6.9	39.1	47.0	7.0		
		3.6	39.3	50.3	6.8	問3-15	子どもが調べたり考えたことを、わかりやすく話せるようになってきた。	5.6	43.7	45.0	5.6		
		2.6	30.6	54.7	12.1	問3-16	子どもからいろいろなアイデアや意見がよく出るようになってきた。	7.0	41.0	47.1	4.8		
	社会的実践力	2.9	30.5	53.7	12.9	問3-17	子どもの社会の出来事への関心が高まってきた。	10.9	50.2	35.2	3.8		
		2.4	22.6	61.3	13.7	問3-18	子どもがまわりのめいわくにならないよう気を使うようになってきた。	13.4	59.8	24.0	2.9		
	豊かな心	2.5	24.0	59.0	14.6	問3-19	子どもが自分でやるべきことは責任をもってやるようになってきた。	14.1	56.9	26.1	3.0		
2.3		26.7	58.5	12.5	問3-20	子どもに協調性や人の考えを尊重する姿勢が育ってきた。	13.3	58.9	25.3	2.5			
自己成長力	3.7	42.2	43.6	10.6	問3-21	子どもに自分の能力をもっと伸ばしたいという意欲がでてきた。	12.7	45.4	38.0	3.9			
	3.3	37.5	51.1	8.0	問3-22	子どもの態度に落ち着きと自信が感じられるようになってきた。	7.6	48.8	39.1	4.5			
	4.5	55.4	30.6	6.9	問3-23	将来への夢や目標についての子どもの考えが深まってきた。	9.6	38.2	45.5	6.7			
教師に対する信頼	4.5	26.4	54.0	15.1	問3-24	教師への子どもの信頼感が深まってきた。	9.6	46.3	37.4	6.7			

「あなたのお子様の最近の様子について、学校の取り組みの成果と感じられることとして、次のようなこと(各設問のようなことは)どの程度あてはまりますか?」という問いに対する回答状況を示す。無回答・無効回答は除いた数値となっている。有効回答件数は、小学校保護者：約3800件、中学校保護者：約2480件。

次に、学校教育の取り組みの成果を保護者がどう認識しているかを見てみよう。

前ページの**図表 2-4-2**は、「教科学力」「学びの基礎力」「生きる力」ならびに「先生への信頼」に関わる各設問への保護者の回答状況を示したものである。図表には示していないが、カテゴリ別の4件法(基準2.50)の平均スコアをみると、「教科学力」：小学校2.56・中学校2.45、「学びの基礎力」：小学校2.52・中学校2.49、「生きる力」：小学校2.68・中学校2.64となっており、これらのスコアは、教師の成果認識のスコア(次節図表2-5-1)と比べて0.6

～0.8ポイントも低く、保護者の評価は教師の自己評価よりもかなりきびしいことがわかる。

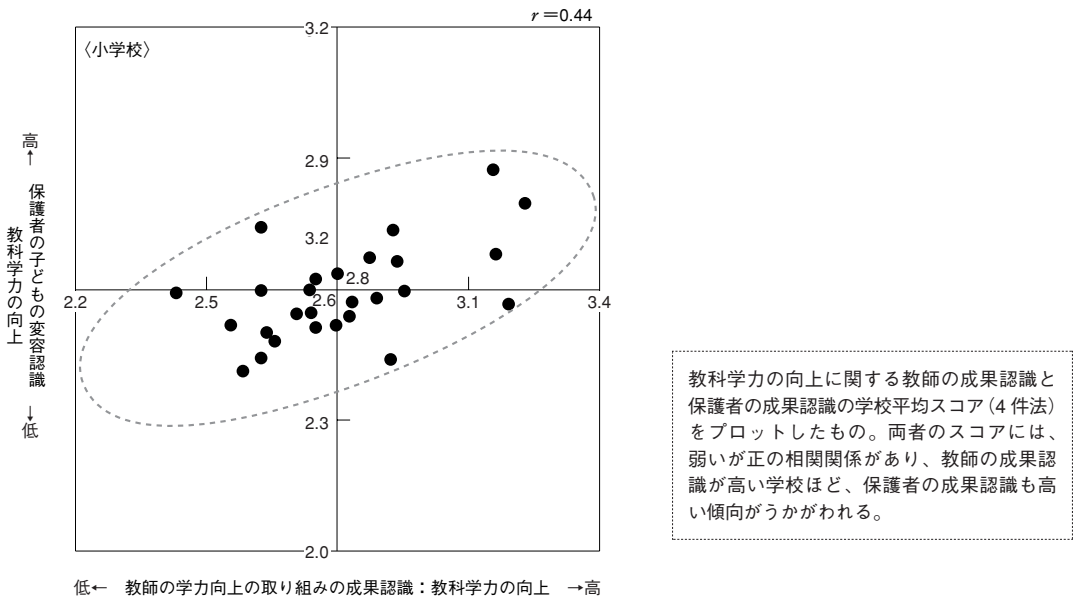
保護者の成果認識の中で、相対的にスコアが高いのは、「生きる力」の領域である。これは次節の図表2-5-1に見る教師の自己評価とは逆の傾向を示している(例えば、小学校教師について；「教科学力」2.89、「学びの基礎力」2.89、「生きる力」2.81)。とくに「自分でやるべきことは責任をもってやるようになってきた」という項目については、小・中学校の保護者ともに、トップボックスのスコアは最も高く、セカンドボックスと合わせて70%強となっている。

### 3 保護者と教師の成果認識との間には弱い正の相関がある

**図表 2-4-3**は、教科学力の向上に関わる設問について、教師と保護者の学校ごとの平均スコアを小学校についてプロットしたものである。両者は、弱いながら正の相関関係を示していることがわかる(相関係数  $r = 0.44$ )。すなわち、保護者の成果認識は、全体として教師の成果認識よりも辛いながらも、教師が努力して成果が上がったと感じている学校で

は、保護者も学校教育の成果として子どもの変容を感じているのである。これは、学校の努力が子どもの変容を通して保護者に届いている一面を表すものであろう。中学校についてもやや相関の度合いは下がるが同様な傾向を示している( $r = 0.37$ )。また、「学びの基礎力」や「生きる力」についても同様である。

**図表 2-4-3 保護者の学校教育の成果としての子どもの変容認識と教師の認識との関係**



## 子どもの変容そのものよりも学校の取り組みの熱心さに保護者はより満足を感じている

図表 2-4-4 保護者の学校への総合満足度

設問の 카테고리	小学校 (%)					設問番号	設 問 内 容	中学校 (%)				
	100	80	60	40	20			0	0	20	40	60
総合的満足度	8.2		63.5		26.9	問4-1	この学校に子どもを通わせてよかったと思う。	23.6		60.5		13.7
	1.4											
	15.2		62.0		21.0	問4-2	この学校はこれからもよくなっていくと思う。	17.8		56.5		22.4
	1.8											

図表 2-4-4 は、「この学校に子どもを通わせてよかったと思う」「この学校はこれからもよくなっていくと思う」という項目への保護者の回答状況を示すものである。これらの項目は、保護者の学校に対する総合的な評価指標あるいは満足度・信頼度指標と考えられるものである。前者の項目が、子どもが入学してから現在に至るまでの学校の教育活動総体への評価と学校の地域的評価(評判)も含んだ総合的な評価を表しているとすれば、後者は、これに加え、学校の教育ビジョンや組織・体制の連携性・継承性の確立度合い、さらには地域の発展性などの考慮も含んだ学校の将来性の判断が総合的に加味された評価となっていると考えられる。このことが前者よりもややスコアが下がっている理由と推察される(ただし、回答の学校平均で見た両者の相関係数は、小・中学校ともに0.95であり、強い正の相関を示す)。

学校選択制が広がる中、保護者の学校への満足度をどう高めるかは学校経営にとって切実さを増しているテーマであろう。

図表 2-4-5 は、保護者の「この学校に子どもを通わせてよかった」かどうかを問う設問に対する回答の学校平均スコアと学校教育の成果として子どもの教科学力が向上したかどうかを問う設問への保護者の回答の学校平均との関係を示すものである(小学校と中学校を合わせてプロットしている)。「学びの基礎力」や「生きる力」についてもほぼ同様な傾向を示す。この図表から、学校教育の成果として子どもの変容を感じている保護者の割合が高い学校ほど、保護者の学校への総合的な満足度も高い傾向を

確認できる。学校教育の成果として子どもの変容が感じられるのであれば、学校への満足度も高くなるのは当然の結果とも言える。

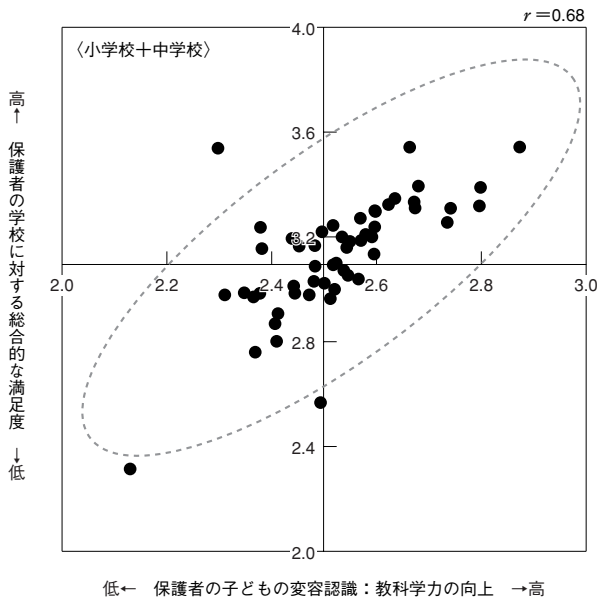
図表 2-4-6 は、同様に保護者が「この学校に子どもを通わせてよかった」かどうかを問う設問に対する回答の学校平均スコアと、学校の学力向上の取り組みに対する保護者の認識を問う設問群(図表 2-4-1)に対する回答の総合平均スコアとの関係を示すものである。学校が学力向上を熱心に推進していると認識している保護者が多い学校ほど、保護者の学校に対する総合的な満足度が高いという相関関係を確認できる。この図表と上の図表 2-4-5 を比べてわかるように、この相関関係は学校教育の成果(結果)としての子どもの変容認識の場合に比べてよりシャープであり、保護者は、学校教育の成果そのものよりも、学校の取り組みの熱心さ、すなわち学校・教師がどれだけ教育にコミットしているかということに対してより敏感に反応しており、そのことを感じられる度合いが学校に対する満足度・信頼感を大きく左右していることを示している。図表に示していないが、学力向上の取り組み状況の認識の中でも保護者の総合満足度と相関が一番強いのは、小学校では、図表 2-4-1 の「校内の組織・体制」の 카테고리であり、中学校では「教育課程の整備・充実」の 카테고리である。反対に相関が最も低いのは、小・中学校ともに「教育資源の有効活用」となっている。

以上のことから、保護者の満足度を高め、学校への保護者の支持を高めていくためには、子どもの学力を高めることそのもの、端的に言い換えるならば

目先の学力調査の結果を向上させることそのものよりも(むろん、それは大切であるが)、子どもの成長(総合的な学力の向上)のために、保護者や子どもの願いを受け止めながら真剣に取り組んでいる姿勢をどれだけ保護者にアピールすることができるかとい

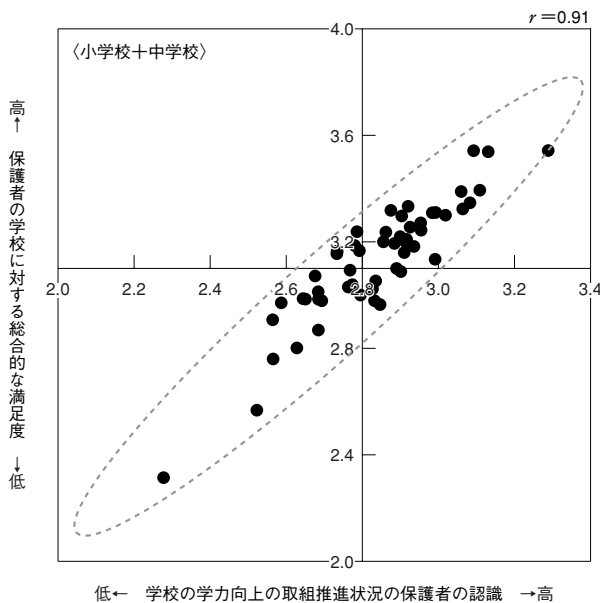
うことがより大切であると考えられる。このことは、保護者への学校の説明責任や開かれた学校運営の大切さを改めて示すとともに、保護者に対する学校の広報の在り方を見直し戦略的に強化することの意義を示唆しているものとも考えられる。

図表 2-4-5 保護者の「学校に対する総合的な満足度」と子どもの変容認識(教科学力の向上)との関係



保護者の学校教育成果としての子どもの変容(教科学力の向上)認識の学校平均スコアと保護者の学校への総合的な満足度(「この学校に子どもを通わせてよかった」のスコア)の学校平均スコアとの関係を示したもの。両者の間にはあきらかな正の相関関係が認められる。この傾向は、「学びの基礎力」や「生きる力」についても同様である。

図表 2-4-6 保護者の「学校に対する総合的な満足度」と学校の学力向上の取り組みの推進状況の認識との関係



学校の学力向上の取り組み状況の認識(全体)の学校平均スコアと学校への総合的な満足度(「この学校に子どもを通わせてよかった」のスコア)の学校平均スコアとの関係を示したもの。両者の間には、子どもの変容(成果)認識の場合よりもシャープな相関関係が認められる。

## 2 家庭と学校の役割分担についての保護者の意識

次に、視点を転じて、保護者が子どもの教育に関して家庭と学校の役割分担をどう考えているかにつ

いて見ていくことにしたい。

### 保護者の「家庭の教育」の役割認識は全般に高い

図表 2-4-7 は、「教科学力」「学びの基礎力」「生きる力」それぞれに関わる計 12 の設問について、家庭の役割の重要度、ならびに学校の役割の重要度に関する保護者の認識を示したものである。全般に家庭の役割と考える割合は、セカンドボックスまで含めると 90% を超えるものが大部分であり、家庭の教育力の果たす役割の大きさについての保護者の認識(自覚)は全般的に非常に高いことがわかる。

「家庭の役割」>「学校の役割」の関係になっているもので、差の大きいものからいくつか見ると(トップボックスの数字で)、**基本的な生活習慣の確立**(小学校：91 - 41 = 50、中学校：88 - 41 = 47)、**自分の将来の進路や生き方を考える力**(小学校：71 - 48 = 23、中学校：75 - 62 = 13)、**社会や時代の変化に対応する力**(小学校：61 - 49 = 12、中学校：62 - 52 = 10) などとなっている。

反対に、「学校の役割」>「家庭の役割」の関係になっているものを同様に見ると、**基礎的な学力**(小学校：91 - 46 = 45、中学校：87 - 42 = 45)、**より良い学び方や計画的な学習の進め方**(小学校：72 - 30 = 42、中学校：73 - 32 = 41)、**文章力や計算力**(小学校：80 - 44 = 36、中学校：73 - 36 = 37)、**集団で生活し協力していく力**(小学校：88 - 51 = 37、中学校：84 - 52 = 32)、**学ぶこと意義をつかませること**(小学校：74 - 50 = 24、中学校：73 - 51 = 22) などとなっている。ただし、中学では「上級学校への進学に必要な学力」についても(68 - 31 = 37)、「文章力や計算力」にほぼ並んでいる(小学校では 6 番目)。

基本的な生活習慣の確立など、「家庭の役割」>「学校の役割」となっているものについては、大部分の保護者が家庭の役割と認識していることを踏まえて、家庭にその教育の役割を基本的に委ね、学校はそれをサポートする役割と位置づけた取り組みが現実的と考えられる。むしろ、保護者が家庭教育の役割と認識していることと、実際に教育力が発揮できているかどうかは別の問題であり、実際に家庭の教育力が機能していくためには学校のみならず行政や地域の様々なサポート・施策が必要となることは周知の通りである。学校のサポートとしては、少なくとも学校で取り組まれているように、保護者同士の体験談やノウハウの交流機会の提供(=保護者の相互教育力の活用)、あるいは「家庭教育の手引き」作成などを通じた支援が期待される。逆に、基礎的な学力(の育成)など「家庭の役割」<「学校の役割」となっているものは、学校が基本的にその役割を担い、家庭には学校の取り組みのサポートの役割を要請するといった図式が成り立つ。保護者の意識の現状を固定的にみることは避けなければならないが、現実から出発するとすれば、このような役割分担の考え方を取ることが可能と考えられる。

いずれにせよ、保護者の家庭の教育力の役割認識の全般的な高さは、家庭の教育力のポテンシャルの高さを意味しており、このポテンシャルの高さに依拠して、今後一層、家庭の教育力の発揮を実際的に促す学校の取り組みを高めていくことが期待されているのではないだろうか。

図表 2-4-7 家庭と学校の役割分担に関する保護者の認識

■ とても重要 ■ まあ重要 ■ あまり重要ではない □ まったく重要ではない

〈家庭の役割〉

設問のカテゴリー	小学校 (%)					設問番号	設 問	中学校 (%)					
	100	80	60	40	20			0	0	20	40	60	80
教科学力	基礎・基本	48		49.2		45.5	問8-1	基礎的な学力		42.3		48.4	8.9
	受験学力	16.5		52.1		30.0	問8-2	上級学校への進学に必要な学力		30.5		54.9	13.5
	技能・表現力	44		51.1		44.3	問8-3	文章力や計算力		35.6		56.5	7.5
	学習意欲	38.4		59.6			問8-4	学習への意欲や学ぶ姿勢		57.6		39.9	
学びの基礎力	基礎体験	8.5		91.1			問8-5	基本的な生活習慣(規則正しい生活など)			87.7		11.7
	学びに向かう力	47.3		49.5			問8-6	学ぶことの意義をつかませること		51.3		45.5	
	自ら学ぶ力	10.2		59.6		29.9	問8-7	より良い学び方や計画的な学習の進め方		31.6		57.8	10.2
	学びを律する力	21.9		77.4			問8-8	途中でなげださないで最後までやりとげる力			72.4		26.5
生きる力	問題解決力	60		51.2		42.6	問8-9	自ら課題を発見し、解決していく力		44.0		49.4	6.3
	社会的実践力	36.2		61.3			問8-10	社会や時代の変化に対応する力		61.9		35.6	
	豊かな心	46		44.6		50.6	問8-11	集団で生活し協力していく力		52.2		42.3	5.1
	自己成長力	27.1		71.4			問8-12	自分の将来の進路や生き方を考える力		74.9		24.4	

〈学校の役割〉

設問のカテゴリー	小学校 (%)					設問番号	設 問	中学校 (%)					
	100	80	60	40	20			0	0	20	40	60	80
教科学力	基礎・基本	9.2		90.5			問8-1	基礎的な学力		87.4		12.0	
	受験学力	10.8		37.2		51.1	問8-2	上級学校への進学に必要な学力		68.2		28.4	
	技能・表現力	19.6		80.0			問8-3	文章力や計算力		73.4		25.5	
	学習意欲	23.4		75.9			問8-4	学習への意欲や学ぶ姿勢		72.4		26.8	
学びの基礎力	基礎体験	6.8		51.4		41.4	問8-5	基本的な生活習慣(規則正しい生活など)		40.9		49.4	8.9
	学びに向かう力	25.6		73.7			問8-6	学ぶことの意義をつかませること		72.8		26.1	
	自ら学ぶ力	26.6		72.4			問8-7	より良い学び方や計画的な学習の進め方		73.3		25.6	
	学びを律する力	29.8		69.0			問8-8	途中でなげださないで最後までやりとげる力		63.5		34.0	
生きる力	問題解決力	38.3		59.7			問8-9	自ら課題を発見し、解決していく力		58.5		39.0	
	社会的実践力	46.4		49.1			問8-10	社会や時代の変化に対応する力		51.9		43.7	4.1
	豊かな心	11.3		88.3			問8-11	集団で生活し協力していく力		84.1		15.2	
	自己成長力	47.3		47.8			問8-12	自分の将来の進路や生き方を考える力		62.4		35.3	



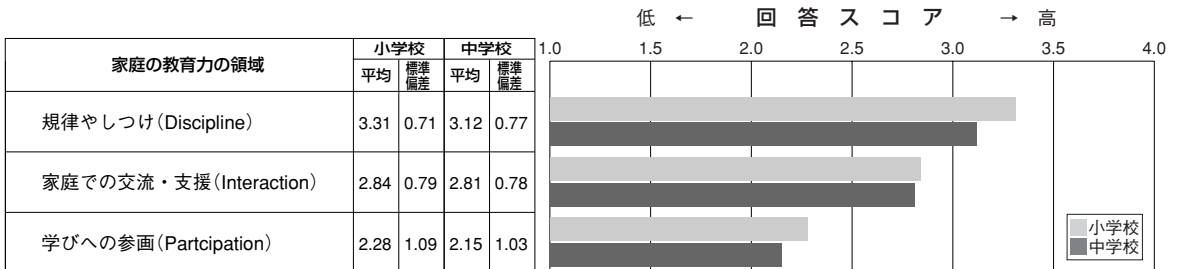
### 3 保護者から子どもへの働きかけ(家庭の教育力の発揮)の状況

次に、保護者から子どもへの働きかけの状況を見ていく。

今回の調査では、本章第1節で述べられているように、家庭の教育力を「規律やしつけ(Discipline)」 「家庭での交流・支援(Interaction)」 「学びへの参画(Participation)」の3つの構成要素から捉え(D I Pモ

デル)、それぞれの領域ごとにいくつかの下位のカテゴリを設けて設問を作成した。図表2-4-8は、D・I・Pの各領域の平均スコア(4件法)をグラフにしたものであり、図表2-4-9は、各設問内容と回答状況の詳細を示したものである。

図表2-4-8 家庭の教育力(D I Pモデル)の領域別平均スコア



図表2-4-8から、各領域の平均スコアで見ると、小・中学校ともに「規律やしつけ(D領域)」に関わる働きかけのスコアが最も高く、反対に最も低いのは保護者自身の「学びへの参画(P領域)」、中間は「家庭での交流・支援(I領域)」となっている。小・中学校との間の違いは、おそらく、子どもの学年の違いによる保護者の働きかけの変化を示していると考えられ、全体として子どもの成長に応じて「規律やしつけ」のための働きかけは弱まるとともに、保護者自身の「学びへの参画」の度合いも低くなっている様子がうかがわれる。反面、「家庭での交流・支援」に関わる働きかけは、全体としては、あまり変化がない。

家庭の教育力をD I Pモデルに基づいて考える際、基本的に留意しておきたいことは、3つの領域の働きかけの子どもへの作用は独立的なものではなく、相互

に影響し合うということである。同じ「しつけ」に関する働きかけであっても、頭ごなしに感情的になされるのか、将来社会に出て必要となるスキルや習慣としての理解を促すような指導的アドバイスを大切にしたり親自身が自ら手本を示すような共に育つ支援的なスタンスでなされるかどうかによって、子どもに与える影響は大きく異なってくる。また、親自身が学ぶ姿を見せているかどうかによって、子どもとの交流や支援の有効性も変化してくる。すなわち、単純化して言えば、D・I・Pの働きかけがどのようなパターンで(=どのような‘化学結合’で)なされるかが子どもに与える影響を左右するのである(この点の詳しい分析は、第3章2節でなされている)。

この大きな傾向と留意点を踏まえながら、次に、図表2-4-9のデータの特徴的な点を見ていこう。

図表 2-4-9 家庭での保護者の働きかけの状況(DIPモデル)

とてもあてはまる 
  まああてはまる 
  あまりあてはまらない 
  まったくあてはまらない

設問のカテゴリ	小学校 (%)				設問番号	設 問	中学校 (%)				
	100	80	60	20			0	20	40	60	80
規律やしつけ(D領域)	生活習慣と社会性の育成	基本的な生活習慣	82	46.2	45.2	問5-1	早寝早起きなど、規則正しい生活をするように言っている。	32.6	53.5	12.6	
			27.5	69.3		問5-2	朝食は毎日しっかり食べるように言っている。	60.0	33.4	53	
			104	42.2	46.7	問5-3	食器の後片付けなど、自分のことは自分でするように言っている。	37.6	44.7	15.9	
			26.5	42.9	27.0	問5-4	テレビを見る時間やゲームをする時間を制限している。	15.9	41.3	35.7	70
			43	45.3	50.0	問5-5	約束したことや自分の言動に責任を持つように言っている。	44.1	49.7	57	
	社会性の育成	27.3	72.0		問5-6	他の人に迷惑がかかることをしなないように言っている。	67.1	31.2			
		89	50.9	39.9	問5-7	相手の立場を尊重し、自分と違う考え方も大事にするように言っている。	41.3	49.7	83		
		45	29.4	65.4	問5-8	宿題は、必ずやり終えるように言っている。	43.3	40.7	13.3		
		87	48.8	42.0	問5-9	むずかしい問題でも、投げ出さずにじっくり考えるように言っている。	27.7	53.2	16.8		
		15.9	49.0	34.6	問5-10	子どもが意欲を示したことは年齢に関係なく挑戦させている。	28.9	49.5	20.3		
学習習慣の確立	宿題やテストへの対応	26.4	47.6	23.9	問5-11	ふだんから計画的に学習するように言っている。	26.4	50.7	20.3		
		32.6	43.6	18.8	問5-12	学校で習ったことが社会に出て役立つ話を聞かせることがある。	19.5	42.6	33.0	50	
		73	47.6	44.8	問5-13	やりはじめたことは最後までやり遂げるように言っている。	36.9	53.0	9.3		
		16.9	49.6	32.8	問5-14	よく確かめてかた違いや思い込みをなくすように言っている。	28.1	53.0	17.3		
		39.7	55.0		問5-15	人が話をしているときは最後までしっかり聞くように言っている。	43.7	47.7	77		
家庭での交流・支援(I領域)	基本的スタンス	21.0	66.2	12.2	問6-1	子どもに言うだけでなく、自ら手本を示すようにこころがけている。	10.7	64.3	24.1		
		37.4	53.7	72	問6-2	子どもの意見や判断を尊重して、できるだけ口出ししないようにしている。	9.0	57.1	32.1		
		32.8	54.7	11.6	問6-3	子どもに、自分自身の成長や変化に気づかせるようにしている。	9.4	55.1	33.9		
		15.2	39.9	42.6	問6-4	できるだけ家族そろって夕食をとれるようにこころがけている。	37.5	42.4	17.1		
		10.0	56.0	33.9	問6-8	子どものよいところをできるだけ認めて自信を持たせるようにしている。	28.6	59.1	11.5		
	子どもの目標づくり支援	29.6	47.2	21.1	問6-5	子どもから将来の夢や目標について話をよく聞いている。	22.5	48.5	26.2		
		34.0	44.7	18.3	問6-6	将来の夢の実現のために今どんなことをすることが大切なのかについて考えるようにしている。	26.1	50.1	21.7		
		24.2	53.2	21.4	問6-7	興味・関心のあることを自分で調べたり、勉強するようにすすめている。	19.0	53.3	26.1		
		17.0	50.9	31.1	問6-9	働くことの大切さや尊厳をいっしょに考えるようにしている。	27.0	52.5	19.4		
		59	35.9	38.3	19.9	問6-10	自分や子どものこのころの夢や、その実現のためにがんばった話を聞かせることがある。	19.3	40.0	35.4	52
豊かな体験活動	29.6	48.7	18.2	問6-11	成績表(通知表)を見て、子どもとこれからの目標について話をしている。	22.2	53.0	22.6			
	8.1	47.4	33.2	11.3	問6-12	子どもといっしょに本を読み、読んだ本の感想を話し合っている。	7.5	25.7	51.9	14.9	
	8.4	46.5	35.7	9.3	問6-13	新聞に書かれていることについて、子どもとよく話をしている。	11.2	38.0	43.8	70	
	28.7	43.0	24.7		問6-14	子どもが小さいころから、自然の中で、家鴨いっしょに遊んだり、活動したりする経験を通して、	23.0	43.0	29.4	46	
	45	28.0	45.2	22.3	問6-15	地域の行事や活動にできるだけ子どもと参加するようにしている。	15.9	39.2	37.6	72	
	12.9	27.6	36.9	22.5	問6-16	子どもといっしょに、美術館や博物館に行ったことがある。	17.9	37.0	31.2	13.9	
	17.6	26.9	33.5	22.1	問6-17	子どもといっしょにパソコンを使ったり、インターネットで何かを調べたりする。	18.4	33.6	29.6	18.4	
	49	28.2	37.8	29.1	問6-18	子どもに家庭の中の仕事で頼りにしてまかしている役割がある。	21.6	33.3	36.3	87	
学びへの参画(P領域)	学校発信への関心	31.8	65.0		問7-1	学校通信や学級通信にはいつも目を通すようにしている。	53.6	37.8	72		
		11.5	28.5	57.6	問7-2	授業参観には毎回参加するようにしている。	31.0	32.9	29.1	70	
		73.7	19.0	47	問7-3	ゲストティーチャーとして授業に協力したことがある。	16.5	79.0			
		55.3	18.7	17.3	87	問7-4	授業の手伝いをするボランティアとして参加したことがある。	9.1	18.7	69.1	
	学校行事への参加状況	41.6	38.5	15.7	42	問7-5	保護者会やPTA総会で、学校の希望や意見を発言するようにしている。	13.2	40.3	43.1	
		28.5	41.4	24.0	60	問7-6	授業の手伝いをするボランティアをやりたいと思う。	16.4	44.0	36.0	
		40.4	44.0	12.1		問7-7	ゲストティーチャーとして授業に協力したいと思う。	9.5	42.5	45.7	
	学校への協力・参画意向	6.1	23.5	50.0	20.5	問7-8	教育についてのテレビ番組を見たり、新聞・雑誌の記事に目を通したりしている。	17.8	53.0	24.0	52
		26.3	49.2	19.7	48	問7-9	教育に関する講演会などにはできるだけ参加するようにしている。	59	25.8	48.4	20.0
		35.9	32.4	20.8	10.9	問7-10	教養を身に付けたり資格を取るために学習や習い事している。	10.0	22.1	34.6	33.2
学習者自身の生涯学習への参画											

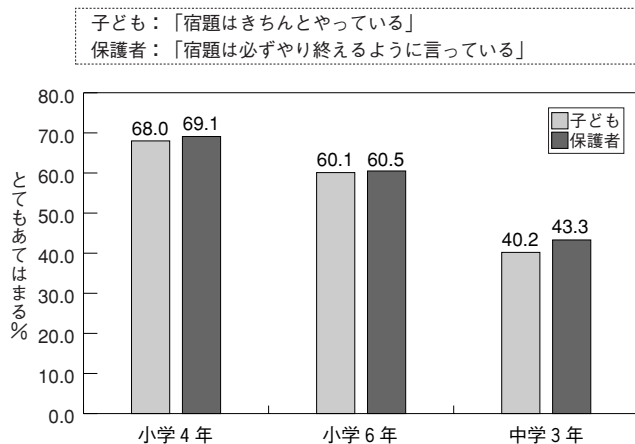
無回答・無効回答は除いた数値となっている。有効回答件数は、小学校保護者：約3800件、中学校保護者：約2480件。  
 設問番号にアミをかけたものは、第3章で「家庭の教育力」の総合スコアを計算する際に用いた項目を示す。

## 1 「規律やしつけ」—高学年の「学習習慣の確立」への働きかけの転換が求められている

「規律やしつけ」の領域については、「生活習慣と社会性の育成」と「学習習慣の確立」の2つのカテゴリーに分けて項目を設けているが、全体として、小・中学校ともに、保護者の働きかけの強さは、「生活習慣と社会性の育成」>「学習習慣の確立」という関係になっている。前者について具体的にみると「規則正しい生活」「後片付け」を働きかける割合はトップボックスのスコアで、小学校の保護者でそれぞれ45%・47%、中学校の保護者で33%・38%となっている。これらのスコアと先に見た「基本的な生活習慣の確立」に対する家庭の役割の重要度認識（「とても」と肯定する割合が9割程度）との間にはかなり隔たりがあるが、これは家庭の役割を認識していても実際には有効な働きかけができていないという部分と子どもが成長して働きかけなくてもそのような習慣がすでにできているためという2つの要因が考えられる。

「学習習慣の確立」の働きかけについて見ると、トップボックスでスコアが高いのは、小・中学校ともに「宿題は、必ずやり終えるように言っている」という項目であり、下の図表2-4-10に示すように、学年が上がるにつれて親の働きかけが減少する傾向がある。この傾向については、子どもの学年が上がるにつれて子どもの自主性を尊重するという傾向の現れと肯定的に受け止めたい面もある。しかし、「宿題はきちんとやっている」と回答する子どもの割合は学年が上がるにつれて減少しており、保護者の働きかけの減少と呼応した形となっている（この項目と教科学力との関係については、本章第2節の図表2-2-4参照）。これらのデータは、子どもの学習習慣の確立への保護者の関与の在り方を考え直してもらい取り組みが必要であることを示すものではないだろうか。

図表2-4-10 宿題に対する保護者の働きかけと子どもの状況の学年変化



## 2 「家庭での交流・支援」—親が子どもと共に育つ姿勢の大切さ

次に「家庭での交流・支援」の領域に移ろう（図表2-4-9）。

この領域には、大きく「基本的スタンス」「認知的活動の誘導・支援」「体験的活動の誘導・支援」の3つのカテゴリーを含んでいる。「基本的スタンス」は、

子どもとの交流や働きかけを親がどのような姿勢で臨んでいるのかを問うもので、率先垂範的な姿勢、子どもの自主性の尊重、家族だんらんの重視、子どもの成長や変化を認め、よいところに自信を持たせるような姿勢の度合いをたずねている。「認知的活動

の誘導・支援」は、子どもの将来への夢や目標、学習上の目標について共に考えるような働きかけ、「体験的活動の誘導・支援」は、子どもと共にいろいろな体験活動を行なうことを通して各種スキルや資質を身に付けさせるような働きかけである。

小・中学校ともに、カテゴリ別の回答平均スコアで見ても(図表には示していない)、「認知的活動の誘導・支援」>「体験的活動の誘導・支援」という関係にあり、この差は中学校で拡大している。また、「認知的活動の誘導・支援」のカテゴリについては、小学校(2.88)<中学校(2.92)、「体験的活動の誘導・支援」については、小学校(2.70)>中学校(2.58)という関係にある。これらは、子どもの成長段階に応じた保護者の接し方の変化を示すものであろう。しかし、全体として小・中学校ともにこれらの保護者の働きかけを活性化させていくような家庭への働きかけが求められていると考えられる。

「基本的スタンス」の中では、「子どもの自主性の尊重」が学年が上がるにつれてスコアが高まる唯一の項目となっている。「自ら手本を示す」の率先垂範的姿勢については、小・中学校の間でほとんど変化がなく、トップボックスは10%強程度であり、自らできていないことを子どもには求め子どもの反発を買っているような保護者が残念ながら少なくないことがうかがわれる。見方を変えるならば、「規律やしつけ」の領域においてさえも親が子どもと共に育つ姿勢が大切であることを改めて示すものと言えよう。

「認知的活動の誘導・支援」の中で、最もスコアが高いのは、小・中学校ともに「働くことの大切さや

尊さをいっしょに考える」ことであり、トップボックスのスコアで、小学校31%・中学校27%となっている。次いでスコアが高いのは、小学校では「興味・関心のあることを自分で調べたり、勉強したりするようにすすめている」という項目であるが(21%)、中学校では反対にこの項目のスコアが最も低くなっている(19%)。小・中学校ともに、子どもの興味・関心の対象について自ら学ぶような働きかけが積極的になされている割合は低く、学校の宿題など与えられた課題の勉強以上の自主的なテーマへの挑戦を積極的に奨励するような保護者は多くはないことがうかがわれる。中学校では、2番目にスコアが高いのは「将来の夢の実現のために今どんなことが大切なのかいっしょに考えるようにしている」という項目である(26%)。

「体験的活動の誘導・支援」(豊かな体験活動)については、トップボックスの数字で見ても最もスコアが高いのは、小学校では「子どもに家庭の中の仕事でまかせている役割がある」(29%)、中学校では、「小さいころからの自然体験の積み重ね」(23%)となっている。反対にスコアが低いのは、小・中学校ともに(順番は入れ替わるが)、「子どもといっしょに本を読む」(小学校11%・中学校8%)、「新聞に書かれていることについて子どもとよく話す」(小学校9%・中学校11%)となっており、これらの活動については、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と否定的に回答している保護者の割合が小・中学校ともに5割を超えている。

### 3 「学びへの参画」—保護者の学校教育への協力意向は協力経験よりも高い

最後に、「学びへの参画」の領域について見ていく。

この領域には、「学校教育活動への参画」「保護者自身の学習活動」の2つのカテゴリを含んでいる。

「学校教育活動への参画」の中で、最もスコアが高いのは、小・中学校ともに「学校通信や学級通信にはいつも目を通すようにしている」という項目であり、「とても」と積極的に肯定する保護者の割合は、小学校65%、中学校54%、セカンドボックスまでの合計で見ると、小学校97%、中学校91%と非常

に高いスコアとなっている。「あまり」「まったく」と否定的に回答する保護者も小学校で3%程度、中学校では9%存在していることは見過せないが、大部分の保護者は学校の動きに関心を寄せていることが改めてうかがわれる。先に保護者の満足度・信頼感を高めていくために学校の広報活動の見直しの意義に触れたが、学校教育への保護者の関心を高め、さらに家庭での望ましい教育の支援につなげていくような方向での充実が期待される。すでに、多くの学

校で取り組まれているように、家庭にもインターネットが普及しつつあることを踏まえて、HP等で学校と家庭との双方向のコミュニケーションの活性化を図る取り組みなどもその一つに位置づけられよう。

次いで、スコアが高いのは、小・中学校ともに「授業参観」であり、トップボックスで、小学校58%、中学校31%となっており、中学校でのスコアの低下が大きい。中学校では、36%の保護者が、「授業参観」については否定的に回答している。

ゲストティーチャーや授業支援ボランティアとしてなどの学校教育への協力経験は、小・中学校ともに、セカンドボックスまでのスコアで見て、前者は10%未満、後者については、小学校26%、中学校12%となっている。これに対して、今後、ゲストティーチャーや授業支援ボランティアとして学校教育に協力したいかどうかの意向については、小・中学校ともに増えており、セカンドボックスまでのスコアで見て、ゲストティーチャー；小学校8ポイント・中学校7ポイント、授業支援ボランティア；小学校4ポイント・中学校8ポイントのそれぞれ増となっている。これらは、学校からの働きかけ次第で、学校教育への保護者の協力をこれまで以上に得られる可能性の大きさを示していると言えよう。

「保護者会やPTA総会で、学校への希望や意見

を発言するようにしている」という項目では、セカンドボックスまでのスコアを見ても、小・中学校ともに20%未満であり、「まったく」と強く否定する割合はともに4割を超えている。これは、これまでの保護者会やPTA総会の運営の在り方に見直すべき課題があることを示唆している。

「保護者自身の学習活動」として、「教育についてのテレビ番組を見たり、新聞・雑誌の記事に目を通す」という活動は、小・中学校ともに、「とても」と積極的に肯定する割合が20%前後、「まああてはまる」というセカンドボックスまでの合計で7割程度となり、教育をめぐる話題になったり議論されていることや教育に関する新しい動向にメディアを通して触れている保護者は少なくない。このことは、「自分の子どもの通う学校ではどうなのだろう」という問いや疑問が日常的に少なくない保護者の胸裏に浮かんでいることを意味している。それだけに、保護者の関心や疑問と切り結んで学校の考え方や方針をきっちりと説明して保護者の理解を促し、かつそのような機会を学校教育への協力意向を高めたり家庭での望ましい働きかけを促す機会として生かすような取り組みの強化が、保護者の学校への信頼を高め、双方の連携を強めていくためにも有効で大切であると考えられる。

## おわりにー学校間の大きな違いを抱えて

以上、保護者の学校の取り組み状況への評価と満足度、子どもの教育についての家庭と学校の役割分担の認識、ならびに家庭での保護者の働きかけの全体状況を見てきた。しかし、あくまで全体状況にすぎず、実際には、保護者の意識を各項目レベルで見ると学校の取り組みへの評価にせよ、家庭での働きかけにせよ、学校間で大きな違いが全般に存在している。例えば、子どもの学力と相関の高い項目の1つである「テレビやゲームの時間を制限している」という項目では、「とても」と積極的に肯定する割合が最も高い学校(44%)と最も低い学校(12%)では32ポイントの開きがある。また、同様に「働くことの尊さや大切さを子どもといっしょに考えるようにし

ている」では、最もスコアが高い学校(45%)と最もスコアが低い学校(10%)で35ポイントの開きがある。さらに「授業参観」にいたっては、最もスコアが高い学校(80%)と最もスコアが低い学校(29%)で50ポイント強もの差となっている(以上の数値は小学校の例。中学校でも同様)。このように、学校間での違いが大きく、抱える課題もその深さも一様ではないことがうかがわれる。学校での教育活動は、このような学校間による家庭の教育的環境の違いを抱えながら取り組まれていることに改めて思いをいたさざるをえない。今回の保護者調査の結果が、一つひとつの学校の取り組みにとって何らかの参考となることがあれば幸いである。

